

2000年5月より抜髄処置を行った患者である。これらの患者を、根管治療の予後を規定するであろう因子(年齢、性、根管数、歯種等)が均等になるように2群に分け、片方の群(照射群)のみレーザー照射(照射出力5W、パルス200mSec)を行った。照射群では麻酔下にて抜髄直後、根管を過酸化水素水で満たし、根管口にレーザーの先端チップをつけ照射を行った。照射は5回(3秒間に1回1秒間照射)を1セットとし、1根管につき3セット行った。抜髄後の根管治療は原則としてFCを貼薬した。根管充填は1)打診痛の消失 2)根管内の浸出液、出血の消失 3)その他、患者の訴える不快症状の消失時に行った。

【結果と考察】症例数は照射群56名、非照射群56名、合計112名である。照射群と非照射群の間で平均年齢、性、根管数、歯種について同等性の検定を行ったが、偏りはみられずrandomized controlが良好になされていた。ま

た、照射群と非照射群の間で、対象歯牙の症状(自発痛、温熱痛、冷水痛、X線透過像の有無等)に偏りは見られなかった。初期効果を判定するため根充までの日数を求めたところ、照射群16.3日、非照射群18.8日で、照射群で根充までの日数が短縮されていた($p<0.05$)。また、根管充填までの回数も短縮されていた($p<0.05$)。そこで治療日数を目的変数とし、治療日数に影響をあたえそうな因子を説明変数(年齢、性、根管数、歯種、痛みの有無、根尖X線透過像の有無、レーザー照射)とし、数量化理論I類で多変量解析を行った。その結果、性差とレーザー照射の有無の偏相関係数が有意に大きく、またstepwise法によってもこの2変数が統計学的に意味を持つ変数として抽出された。以上の結果よりレーザー照射が治療日数の短縮に寄与していると考えられる。現在、照射を行った長期予後について経過観察中である。

32. 学生参加型授業形態の試み—参画理論の導入—

○大山 静江、沢辺千恵子、岡橋 智恵、
長田 真美、小田島千郁子、五十嵐清治
(北海道医療大学歯学部附属歯科衛生士専門学校)

【はじめに】近年、歯科衛生士に対する社会のニーズは、多様化した価値観に対応できる専門能力が求められている。しかし、現状は、資格取得を重視した学習が先行したり、指示待ちの学生が多く、授業態度も受動的な傾向にある。そこで、学生の主体性を高めるために参加型授業である「参画型理論」を小学校の臨地実習で導入した。

【対象および方法】対象学生は平成12年度第2学年44名、比較対象の母集団は平成11年度第2学年52名である。事前学習から実習終了後のまとめの段階において、従来行っていた方法を本年度は参画型授業に改善して実施した。まず、提出された「実習後の自己評価」を前年度と比較した。その内容は、児童の興味・関心の引きつけ度、実習中の時間配分の適否、目標に対する到達点などの項目を含んでいる。また、学生の「学び(理解の程度)」が

次の障害者施設実習ではどのように変化したかを比較考察した。

【結果および考察】その結果、注目づけができたという満足感や実習後の目標到達点を実感した学生は12年度の方がやや多かった。実習時間配分についても、11年度は「不足」と指摘していたのに対して、12年度は「適切」との回答が多かった。また、学びの変化はそれぞれのレディネスと比較すると、12年度の方が顕著であった。参画型授業をとおして、その問題意識を認識させ、自ら何かをやるという自発的な意識の形成につながったことが示唆された。

【まとめ】本報告では、小学校における臨地実習に参画理論を応用して、その成果についてまとめた。その結果、学生の主体性に関して教育効果の向上が認められた。